若越郷土研究　五十九巻一号

越前大野藩関係者の箱館戦争戦没者の墓碑を訪ねて（二）

南川傳憲

はじめに

前報では、光明寺、江差護国神社、函館護国神社に現存する越前大野藩関係者の箱館戦争戦没者墓碑を紹介した。

その後、北斗市光明寺の住職、冨田豊実氏および北斗市在住の大野文化財保護研究会木下寿実夫会長から、戊辰役殉難者慰霊祭の資料のほか、寺島元大野市長が光明寺に参拝された資料（『広報おおの』一九五号〈昭和五十年四月号〉、大野町）などを頂いた。

また、『奥越史料』永見繁雄氏の「箱館戦争実記（解説）」には、光明寺に残されている越前大野藩士二名の過去帳の写真が掲載されているが、今回大正三年に大野村で『大野村史』を編集した際に当時の村役場の書記が転記した光明寺過去帳も冨田豊美氏からご提供頂いた。

今回は、越前大野藩関係者の墓碑などを平成二十四年、二十五年に継続調査したので、その結果を報告する。

五　松前護国神社

旧幕府軍が蝦夷地開拓を目指して北海道森町に上陸した明治戊辰元年（一八六八）から百四十五年目の平成二十五年十月に松前を訪問した。

木古内（津軽海峡線）駅前から松前出張所行バスに乗車して、約九十分余りで松前町の中心地、松城で下車した。桜のシーズンになると観光客が押しかけて来る人口八千人余の松前町も、筆者が訪問した時はオフシーズンで静まり返っていた。

新政府軍の墓地は市街地の背後にそびえる神止山（かみどめやま）の松前護国神社（招魂場）にあるので、城下通りの菓子店でタクシーを呼んでもらった。

法華寺の東側を通る林道を車で十分程登ると左側に石段があった。「お客さん、ヒグマが出ますから、用心して下さい」の言葉に送られて、昭和五十六年五月に崇敬者一同が寄進した鳥居をくぐった。

お社に向かって右側にひと際大きな墓碑が五基あり、入り口から四番目の石碑に目的とする越前大野藩、岡鍛源良賢の名前が備前藩十四名の戦死者と一緒に刻まれていた。松前の護国神社にも越前大野藩関係者の戦没者碑が現存していた。

写真４　新政府軍協力藩の墓碑五基（松前護国神社）

岡鍛源良賢は己巳の役で、木古内において四月十三日戦死したとされ、その没年月日は碑の記録と一致していた。

己巳の役において松前は江差と同じように前線への補給基地であり、また傷病者の転養先であった関係で、松前藩以外の墓碑も松前護国神社に建立されたものと思われる。

岡鍛源良賢の墓は、その後の調査で江差護国神社にあるとする『大野町史』や『江差町史』の記録に遭遇した。『江差町史』によると、

写真５　大野藩該当墓碑とその部分

戦死者を出した藩からの費用で墓を建立した記録があったので、前報で大野藩戦没者と報告した墓は、越前大野藩または岡鍛源良賢関係者の浄財によるものと考えられた。

また、松前護国神社の境内には明治二己巳年冬に建立した顕彰碑と戦没者二十六名の名前を記した大きな石碑が社の右手奥にあり、それを囲むように松前藩の戦没者（松前藩士五十一柱、役夫三柱、民夫四柱、田村量吉、靖国神社に祀られ女性第一号の川内美岐子）などの墓が配置され、すべての墓に墓碑銘札が立てられていた。

明治元年戊辰役、同二年己巳の役で戦死された人たちの「みたま」を祀って明治二年五月十日当時の松前藩軍事方の発する布令と土民上げての勤労奉仕により創設されたものである。爾来積年の風雪に曝され、石

写真６　松前護国神社墓碑

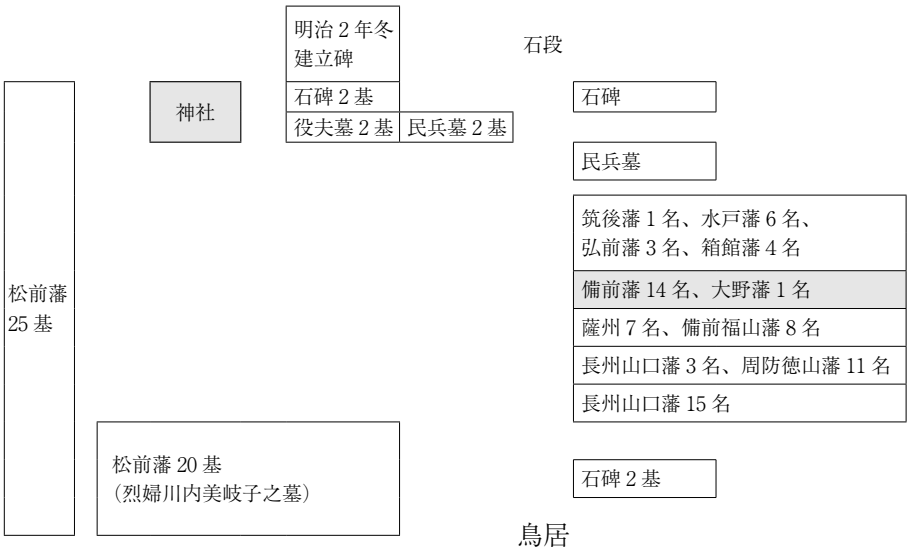

図４　松前護国神社墓碑見取り図

の風化が著しく碑の刻文が見えないものが多く、中には碑本体の倒壊も見受けられる。この状況を憂うるはもとより一基でも形のある内にとの思いに駆られ簡素乍ら墓碑名銘札を作成しここに設置します。

平成十六年五月　松前ロータリークラブ

案内板（原文通り）は破損していたが、現状を物語るに相応しい物であった。

六　曹洞宗　空谷山大泉寺

大泉寺は『箱館戦争と大野藩』や『奥越史料』などに再三紹介されている寺院である。明治二己巳年に函館奪還の前線基地になった所でもあり、戦没者五名がこの寺院に埋葬されたと『大野町史』に記載されている。

この寺院は法源寺四世盤室芳龍大和尚が天和元年（一六一五）に奥尻島（現在の奥尻空港周辺）に「奥尻山大仙寺」として開教・建立した。その後、松前町倉町を経て現在の泉沢村に移転、平成二十七年で開創四百年を迎える古刹である。

海峡線の泉沢駅（無人駅）で下車して津軽海峡を右手に見ながら、国道二二八号線を函館方向に五分ほど戻ると、入り口に「大泉寺」の看板があるのですぐ分かった。境内に入ってみると、寺院に向かって左側に墓地が並んでいるので、比較的古そうな墓標を探してみた。皆どれも地元の方々を埋葬した墓ばかりで、目的とする箱館戦争の戦没者墓標は見当たらなかった。

写真７　古泉神社と忠魂碑

周囲の状況から推察すると、明治政府が神仏分離令を出した際、寺院の敷地が国道を背にして右側が古泉神社、左側が大泉寺に二分割され、その際に墓地も改葬されたようである。古泉神社側の敷地の広場には招魂碑があるだけで、官修墓地が改修されたとすれば、この招魂碑に合祀された可能性は高い

が、確認には至らなかった。

大泉寺ご住職に「箱館戦争で亡くなった越前大野藩士がこの寺に埋葬された記録があるのですが、お寺に何か残されていませんか…」と過去帳に触れてみた。

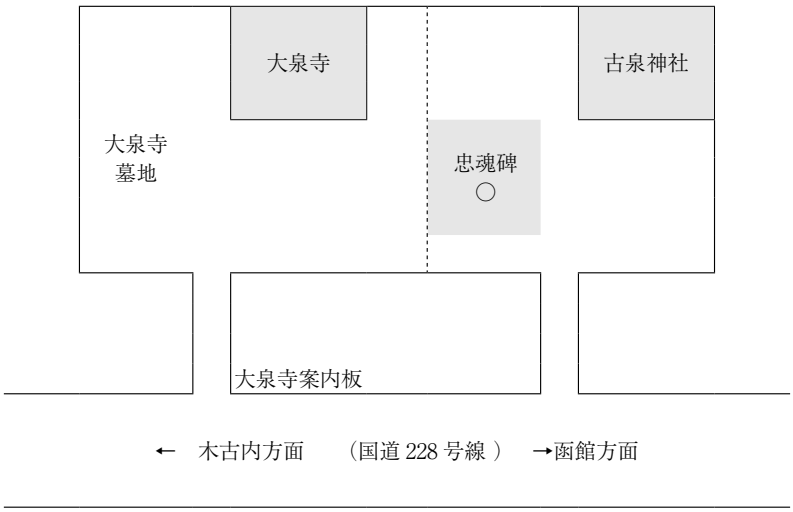

図５　大泉寺・古泉神社境内見取り図

「実は、東京の方も戊辰戦争の戦死者がこの寺で埋葬されたという記録を手掛かりに来られまして…。過去帳には箱館戦争戦没者のお名前があります」と、『奥越史料』の永見繁雄氏の報告を裏付ける情報が得られたが、時間の都合で過去帳を拝見することはできなかった。

写真８　大泉寺

七　青森市三内霊園

『奥越史料』の「箱館出兵留記」および「函館賊徒追討帳・五月要用備忘（堀寛）」では、越前大野藩士吉田留五郎は四月二十九日北海道矢不来で頭（耳周囲）に受傷し、五月三日に隊長堀らと共に深手八名が飛龍丸で青森大病院養生局（塩町、米屋清六方）へ転療したが、五月二十二日夕七つ半に相果てたとされている。

写真９　三内霊園箱館戦争戦没者墓碑

著者の知る限りでは、越前大野市以外の地で吉田留五郎の墓碑を調査した記録は見当たらなかった。もし、墓碑があるとすれば青森市内の寺院または官修墓地のどこかにあるのではないかと考えた。

調査を進めていくと、青森市内にあった官修墓地を、青森市が昭和二十三年七月に改葬した場所が現存した。

この箱館戦争戦没者共同墓地がある青森市三内霊園は三内丸山遺跡の近くで、青森駅から徒歩十分の国道七号線沿いにある古川町バス停から三内霊園（入り口）まで、二十分程度で到着した。三内霊園事務所で官修墓地の場所を確認したところ、花屋さんが数軒立ち並ぶロータリーの一角にあった。花屋さんの話によると、以前ここには官修墓地の説明案内板があったそうだが、平成二十五年十月の訪問時には何にもなかった。

ここには箱館戦争戦没者の墓碑が二十基あって、目的とする越前大野藩吉田の墓は正面に向かって左端にあった。墓碑には、

大野藩　吉田留五郎忠照神霊　明治二己巳年四月廿九日於矢不来負疵　同年五月廿二日青森ニ而死　行年十九歳

と刻まれている。

この墓碑によると、吉田留五郎は矢不来で受傷し、青森に移送十九日後の五月二十二日に十九歳で死亡したことになる。この経緯は函館護国神社の墓碑などと良く符合する。

さて、吉田留五郎が養生局（塩町、米屋清六方）で、わずか十九日余りの間にどのような治療を受けたのか、知りたいところである。

箱館戦争末期の青森町の様子は、『新青森市史』に収載の廻船問屋滝屋伊東彦太郎の日記に詳しく記されている。負傷兵の治療に関する記事を抜粋してみた。

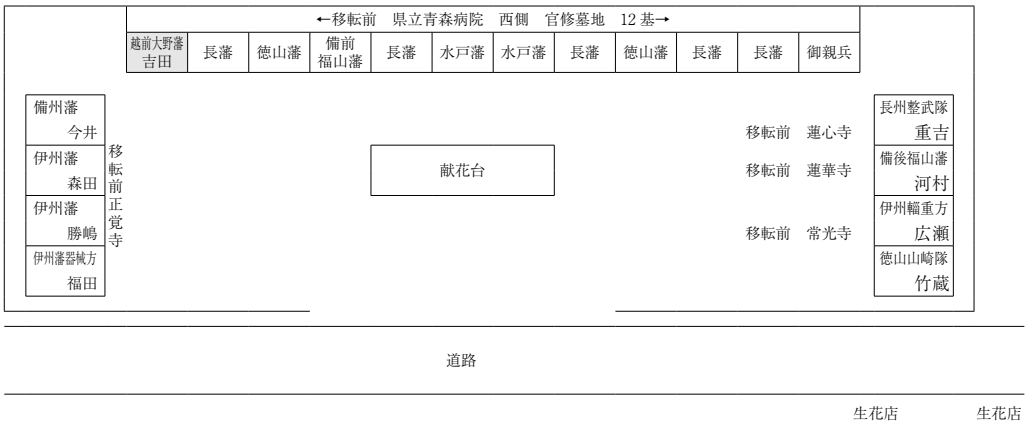

図６　三内霊園箱館戦争戦没者墓碑見取り図

四月二十九日には、新政府軍の怪我人二十六人が青森に送り返されてきた。青森では婦人に怪我人の世話をさせた。五月三日には二十五人、十二日には十九人、十八日には八十八人、六月十二日には十三人、二十六日には五十人の怪我人が到着している。このように続々と怪我人が到着するので、常光寺に病院を設置し、怪我人を一カ所に集めて養生させることにした。二十七日になって、青森に逗留して治療していた怪我人を東京へ引き払うことになった。

青森でもすでに婦人が看護に参画していたことが分かり、箱館戦争が日本における看護婦の歴史の始まりとする史実を裏付ける記述として興味深い。また、新政府軍ではイギリス流の銃創に対する治療法を取り入れたほか、藩医がまず受傷者を治療し、ついで養生局または大病院、さらに重傷者を船で横浜軍陣病院に転送したと『補訂戊辰役戦史』に記されている。また、矢不来の戦場では、日本で初めて負傷兵を担架で搬送したことが『奥越史料』の「箱館戦争実記（有村栄蔵）」、四月二十九日の記録からも読み取れる。

『奥越史料』の「函館賊徒追討帳・五月要用備忘（堀寛）」では、見舞品として「菓子、玉子、鶏など」のほか、興味深い品として、六月三日「大病院から牛肉被下候」の記載がある。当時、牛肉は滋養強壮の薬として使用されていたものと考えられる。

六月二十六日には、米屋の直子（二百疋）、とみ子（百疋）、看病女　豊子　十九歳（百疋）からお見舞（餞別）を贈られたとする記

写真 10　三内霊園　吉田墓碑

録が残されている。なお、越前大野藩の負傷兵は長鯨丸で東京に撤収する七月二十七日頃まで米屋清六方にお世話になっていたことになっている。

さて、箱館戦争戦没者の墓碑が三内霊園へ合祀されるまでの経緯について、青森市総務部総務課市史編纂室の協力を得て調査した。『青森寺院志』などによると、三内霊園に移転する前の吉田留五郎の墓は、現在の青森市役所の跡地にあった県立青森病院（青森県立中央病院の前身）西側の官修戊辰戦争墓地に存在した。この官修墓地は『東奥日報』（昭和九年十月二十一日）、『東奥年鑑　昭和十年』によると昭和九年十月二十日に戊辰会の発起により戊辰堂を新築、慰霊祭を行ったとの記事があったので、この頃に整備されたものと思われる。

さて、吉田留五郎が死亡した明治初年から昭和九年頃までに、長州藩、弘前藩などと越前大野藩の招魂祭を明確に区別できる記録が見当たらないので詳細は不明であるが、『奥越史料』『青森寺院志』などからその間の経緯を推測した。

『奥越史料』の「箱館出兵留記（堀寛）」によると、「五月廿二日青森にて死　吉田留五郎　神主　田川左太夫　社内へ葬」とする記述があり、「函館賊徒追討帳・五月要用備忘（堀寛）」では、「五月二十三日弘前公より霊具として留五郎へ五百疋　下候」の記載がある（現、廣田神社第十七代宮司は、田川伊吹氏である）。

『青森寺院志』によると、当時（明治初期）、名主小浜屋永太郎支配の岩吉が長州・徳山藩に限らず、各藩墓所の清掃を行い、新政府軍より褒美を受けた記載がある。また、明治五年五月清水谷総監が廣田神社境内で、箱館戦争戦死者の招魂祭を挙行し、以後随時弔慰祀も行われたが、次第に荒廃に帰し、知る人も稀なるに至った。

青森郷土会では、その墓標を建立して参拝者の道しるべとし、さらに昭和九年十月青森報知新聞社関社長は、之を遺憾とし、有志の義捐を募り、県立青森病院の西側に招魂堂を新築した旨の記載がある。

なお、廣田神社の位置を入手可能な資料で確認した。明治二十五年の青森市地図には廣田神社の境内に戦死墓はあったが、明治四十五年、大正十五年の地図では現在地に近い場所に神社が移転し、戦死墓の記載は見つからなかった。

『青森案内』によると、廣田神社は天保二年から明治三十年頃までは柳町通神明神社地にあったが、その後現在の位置に遷座したと記されていた。これは、明治四十三年（一九一〇）五月三日の青森大火による移転が考えられた。従って明治三十年頃から戊辰堂が建設された昭和九年までの約三十七年間、吉田留五郎墓碑の場所は追跡できなかった。

従って、吉田留五郎の墓碑は廣田神社（戦死墓）→?→県立青森病院（青森県立中央病院の前身）西側の官修戊辰戦争墓地→青森市三内霊園（現在地）へ移転したものと推論した。

また、三内霊園に祀られている墓碑は青森市内の戊辰堂（青森県立病院西側）から十二基、正覚寺（伊州藩三基、備州藩一基）から計四基、蓮心寺（長州藩）から一基、常光寺（徳山藩、伊州各一基）から計二基、蓮華寺（備後福山藩）から一基が改葬されたことが、「青

森寺院志」から分かった。

しかし、官修墓地の盛衰はその後の日清・日露戦争から支那事変、太平洋戦争を経た戦前・戦後の歴史を振り返るようで一抹の寂寥感を感じる。

八　円通寺（東京、三ノ輪）

写真 11　円通寺

話は一気に北海道・青森から、東京都荒川区にある円通寺に移る。

円通寺はＪＲ常磐線の南千住駅から徒歩十五分の国道四号日光街道沿いにある。寺の歴史は古く、八幡太郎義家が奥羽征伐をした際の四十八人の賊首を埋めた四十八塚を築いたことから小塚原と呼ばれるようになったとされている。

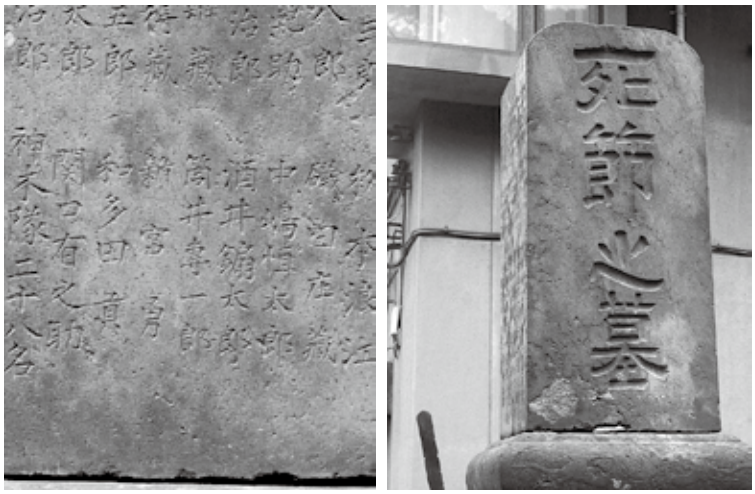

写真 12　死節之墓と筒井専一郎

慶応四年五月十五日、上野で戦死した彰義隊の遺体を円通寺の遺体を円通寺二十三世大禅佛磨大和尚がこの寺に埋葬供養したことで知られている。この寺には上野寛永寺黒門が皇室博物館より払い下げられ（荒川区指定有形文化財）、無数の弾痕が往時の激戦の様子を今に伝えてくれる史跡が残されている。

この境内には旧幕臣の戦死者の供養に尽力した義商三河屋幸三郎が向島別邸に鳥羽、伏見、箱館、会津などの戦死者の氏名を彫って供養したものを移築したと言われている、彰義隊士の墓（戦死墓）

の他、死節之墓などがある。

この死節之墓に越前大野藩士であった筒井専一郎の名前が刻まれている。旧幕府軍の墓に何故越前大野藩の関係者が合祀されているのか疑問に思われる方もおられると思うので、経緯を振り返ってみたい。

筒井専一郎は『大野郡誌』によれば、天保十三年（一八四二）生まれ、幼名は五郎、越前大野藩の足軽であった。妹婿に家督を譲り、天治元年（一八六四）頃江戸に出て幕府の海軍所に入り、小野友五郎の部下になった。旧幕府軍の「回天」の見習一等航海士として箱館戦争に参加した。旧幕府軍は明治元年十一月十五日旗艦であった「開陽」を江差沖で座礁・沈没して失った。この海軍力を補うために、明治二年三月二十五日夜明け、新政府軍の「甲鉄」を奪取しようと企てた宮古湾の海戦において、「回天」の右舷で戦死したとされている。

『越前大野藩と箱館戦争』によると、本行院釈義明として函館・称名寺に埋葬されたとされている。『越前大野藩と箱館戦争』の著者も大正末期に函館の図書館岡田主事に依頼して、筒井専一郎の墓を探した様であるが、函館市内の寺院はその後何度も火災に逢い、その墓碑は発見できなかった。おそらく、旧幕府軍の戦死者を埋葬した函館市内の「碧血碑」に魂は永眠しているのではないかとする記載があった。

越前大野藩士は旧幕府軍の「回天」に筒井専一郎が乗船していたことを知っていた様子を伺わせる記載が、『箱館戦争と大野藩』の各所にあるので、その一部を紹介する。

写真 13　碧血碑（函館市内）

明治元年十二月二十五日、越前大野藩兵や筒井専一郎の義弟（筒井数之助）が青森に退却する際乗船したプロシャ（独逸）船が、「回天」と箱館湾内で鉢合わせをしたが、「砲撃も致さず先ず一命助かり申す。…彼悠然と見過し…」と。

『奥越史料』の「箱館戦争実記（有村栄蔵）」によると、明治二年四月九日再上陸した越前大野藩士は、四月二十日、敵が落として行った紙片を拾ったとしている。これには「回天」の航海士、筒井専一郎が先の宮古湾の戦で戦死したことが書かれており、自分が所属し

ていた第二小隊長多胡半弥に渡した、と記している。

『奥越史料』の「函館賊徒追討帳・五月要用備忘（堀寛）」では、「左之書付　木古内攻撃之節途中にて拾ひ候に写置。…即死筒井専一郎…」と書き写しているので、隊員内で回し読みされていたことが推測される。

九　東京下谷池の端仲町琳琅閣

もう一人の箱館戦争に参加した大野藩関係者として、東京下谷区（現台東区）池の端仲町、琳琅閣の主人（斉藤某氏）に関する記述に出くわした。著者の知る限りでは、初めて耳にする方ではないかと思う。

『箱館戦争始末記』の「あとがき」に、琳琅閣の主人に関する記事が掲載されている。その文言を引用させて頂く。

大野藩（福井）出身、旧幕府軍に参加し、箱館で戦い、敗戦後樺太まで逃げ、世間が落ち着くのを待って東京に戻って来た。東京神田淡路町でニコライ堂の依頼で聖書を販売。その後、下谷区池の端仲町に移転し、古本専門琳琅閣の主人となる。別名、バイブルと言われ、古書の目利きは抜群であったが、明治四十年十二月、五十八歳で没した。

と書かれているが、埋葬先は不明である。

箱館戦争に参加した当時は十八歳前後であったことが推測される。何故、箱館戦争に参加するようになったのか、またどの隊でどのような役割を果たしたのかは今となっては全く不明である。

また、明治四十年に郵便局が作成した地図では、東京市下谷区池の端仲町の地名が不忍の池の湖畔に記載されている。現在の住宅地図のような資料がないか調査したが、執筆時までには確認できなかった。さらに残念な事はこの記述に関する出典の記載がないことである。

この池の端仲町七番地には、慶応から明治にかけて活躍した箱館出身の写真師の横山松三郎が写真館「通天楼」を開いていた。最近の研究によると、横山松三郎は箱館戦争前後には母親がいた函館に戻って写真撮影を行っていたという報告がある。

また、横山松三郎は写真の創と言われた下岡蓮杖の弟子とされている。斉藤某と横山松三郎との接点は不明であるが、不思議な縁である。

一〇　まとめ

箱館戦争と大野藩関係者の墓碑を訪ねる旅も、百四十五年の年月と個人情報保護法の足かせで次第に調査が困難になってきた。

「勝てば官軍、負ければ賊軍」の諺のように、勝者の記録は比較的保存されている。しかし、旧幕府軍の戦没者は函館にある「碧血碑」の様に合葬されたケースが多く、個人の記録まで辿り着くことは歳月が経過した以外に、種々の課題が複雑に絡み合ってくる。また、関係者の口伝に頼らず、可能な限り現存する墓碑と記録（資料）

を中心に報告（年月日は原資料のまま引用）したつもりである。しかし、引用した資料が適切でなく、今回は旧幕府軍に参加した方についても記述したので、配慮をしたつもりであるが、ご迷惑をおかけする事があれば、ご容赦の程お願い申し上げます。

今回の取材では、北斗市光明寺の住職、冨田豊実氏、北斗市在住の大野文化財保護研究会木下寿実夫会長、青森市総務部総務課市史編纂室の皆さん、江差郷土資料館など多くの方のご協力を頂いた。また、どの地を訪ねても、地元の有志により先人の墓碑が大切に保存されていることに深い感銘を受けた。紙面をお借りして御礼を申し上げ、感謝の気持ちとさせて頂きます。

参考文献

・南川傳憲「越前大野藩関係者の箱館戦争戦没者の墓碑を訪ねて（一）」（『若越郷土研究』五七の二、二〇一三年）
・『箱館戦争と大野藩』（私立図書館高島文庫、一九一八年）
・「従軍日記集（箱館戦争記・箱館出張中諸用記・箱館出兵留記・函館賊徒追討帳・函浦江出兵中村井氏日記之内抜書ス）」（『奥越史料』第一号、一九七〇年）
・永見繁雄「箱館戦争実記」（『奥越史料』第二八号、一九九九年）
・坂田玉子「箱館戦争従軍記録史料」（『奥越史料』第二九号、二〇〇〇年）
・「函館戦争記（明治二年）中村雅之進」（『大野市史　藩政史料編二』大野市役所、一九八四年）
・『福井県大野郡誌　下編』（大野郡教育会、一九一二年。復刻版一九八五年）
・『大野町史 第五巻』（大野町史編纂会、一九五七年）
・栗賀大介『箱館戦争始末記』（新人物往来社、一九七三年）
・加藤貞仁『箱館戦争』（無明舎出版、二〇〇四年）
・一戸岳逸編『青森寺院志』（青森通俗図書館、一九三五年。復刻版一九七六年）
・「滝屋伊東彦太郎の日記（伊東家文書）」（『青森市史　第七巻　資料編（一）』青森市、一九六六年）
・『青森市史　第六巻　政治編』（青森市、一九六一年）
・『新青森市史　通史編　第二巻（近世）』（青森市、二〇一二年）
・一戸とも子他「弘前大学における看護教育の変遷（一）」（『弘前大学医学部保健学科紀要』第五巻、二〇〇六年）
・『東奥日報』昭和九年一〇月二一日号
・『東奥年鑑　昭和九年』（東奥日報社、一九三四年）
・『東奥年鑑　昭和十年』（東奥日報社、一九三五年）
・山川清『青森案内』（長谷川書林、一九一五年）
・兵頭二十八『新解函館戦争』（元就出版社、二〇一二年）
・箱石大編『戊辰戦争の史料学』（勉誠出版、二〇一三年）
・合田一道編著『小杉雅之進が描いた箱館戦争』（北海道出版企画センター、二〇〇五年）
・『松前の文化財―日本最北の城下町―』（松前町教育員会、二〇一一年）
・須藤隆仙編『箱館戦争史料集』（新人物往来社、一九九六年）
・『江差町史　第六巻（通説二）』（江差町、一九八三年）
・『江差町史　第三巻（資料三）』（江差町、一九七九年）
・大山柏『補訂戊辰役戦史　上・下』（時事通信社、一九八八年）

（二〇一三年十二月四日受理）

お願い

北海道新幹線の開業などに伴い、拙稿その（一）、（二）でご紹介しました交通機関に廃止・変更などがみられます。江差線（木古内・江差間）は二〇一四年五月十一日を以て廃線になりました。江差線（木古内・五稜郭間）は二〇一六年三月の新青森・新函館北斗間の開業に伴い第三セクターへの移行が検討されていますので、最新の情報をご確認下さい。